

ROTARY CLUB OF

KANAZAWA-NORTH



金沢北ロータリークラブ

例会日：木曜日 12:30～13:30

例会場：卯辰山・ホワイトハウス

事務局：金沢市尾山町9-13・金沢商工会議所

TEL <0762> 63-1151

会長：宗田 市太郎 幹事：平尾 信明

情報委員長：清水 忠

1977・4月28日 第89号

“二百海裡の教訓”

石川県漁連専務理事

北村 重雄氏



十年前、波静かな地中海の一小国マルタから湧き上った二百海裡の主張は、燎原の火のように発展途上国に拡がり、最後まで首肯を拒否し続けていた経済大国米ソをも遂に捲き込んで、今や漁業専管水域二百海裡の設定は、世界の犬勢となってしまった。

日本の漁業は、文字通り四面楚歌の状況にある。こゝ当面は、外に向ってはソ連との忍耐強い漁業交渉を持続しなければならないし、内には遠洋から沿岸へUターンしようとする漁業界の再編成を解決しなければならないなど、内憂外患一挙に噴出する極限状況の中で、漁業者の苦悩ははかり知れない程大きなものがある。

国民は、何れは自らの食糧資源につながるこの問題を、全体の問題として真剣に取り組もうではないか。

唯この際、二百海裡が与えた教訓を、日本人は決して忘れてはいけない。

一つは、かつては海苔の主産地であった東京湾を工業化と都市化の中で泥濘の死の海としてしまったように、日本人は自らの手で自らの母なる海を汚し続けて来たということである。そしてそれが、自らの海を追われた漁民をして沖合へ遠洋へ他国の近海へと駆り立たせ、列国の日本への反感と二百海裡主張の一因を作ったということである。

今一つは、略奪漁業の姿勢である。そこに魚がいれば、その魚の再生産という明日のことには一顧も与えず、すべてを取り尽さずにはおられない日本人のあり方は、自然の摂理に対する冒瀆であり、自らの身に資源枯渇の火をふり注ぐ自己破壊である。

敢えて漁業に限らない。ASEANやEC、中東、アメリカ等世界各国への輸出競走の中で日本人が起している摩擦現象の中に、将来への展望を忘れた、日本人のなりふり構わぬエゴイズムのむき出しの姿勢がないだろうか。

謙虚に反省することは、二百海裡の与えた大きな教訓である。

——金沢北RC例会卓話より—— (文責 清水 忠)

私 の 名 刺

増 江 博



私は大正年間にこの世に生を享けた。

家は代々材木屋を家業として金石港で営み、仕入れは遠く北海道まで船足を延ばし、近くは能登材を、販路は主として金沢市及びその周辺の材木の小売屋さんであったが、大東亜戦争により木材業は統制経済に移行され、混乱のうちにも半ば役人とも言うべき職業を体験し、軍需省、陸海軍省との取引の毎日であった。

戦争は勝利か敗北しかないのである。

しかし不幸にも我が国は敗戦の憂き目となった。

企業も自ら元に還ったのであったが、戦後の混乱は狂乱にも等しく

国家経済は破滅にひんし、大企業は申すに及ばずとりわけ我々中小企業が蒙った弊害は筆舌に尽せないものがあった。

そういった激動期を経験し、昨年は還暦を迎えた。これ又人の子として定められたコースである。これ迄の成長と生活に感謝せねばならない。それは誰になされるべきであろうか。不壊にも「誰が為に」と言う気持が……それを置くには余りにも激動の戦前戦後であったと思っている。

親の恩、師の恩、先輩の恩、その他友達、兄弟等の恩に対して真の理解が出来るようになるのは一寸先の事のようなのである。

かく思う時、世間並びに感謝と恩に対する観念についての今一段の自己的解釈がなければならぬ様に思考されるのである。

安価な感謝ほど自己欺瞞と自己満足に陥れるものはあるまい。

他人を欺くものはあるまい。たとえ人世のうるおいとなり得たとしてもである。

今幸いにも先輩諸兄の御理解により金沢北ロータリークラブの末席を穢すことになった。恩、感謝、そうして社会的使命を!!

職業は木材、新建材の卸売業(一部小売)、趣味は美術観賞と麻雀、家族は妻玄美、長男博夫(加賀木材株式会社専務取締役)、二男邦博一分家(加賀木材株式会社取締役建材部長)、長女悦子は日本電解研磨研究所に嫁いでいる。

理 事 会 報 告

4月21日(木) ホワイトハウス
出席者 12名

●社会奉仕委員会

「ロータリーの森」の件

年次大会記念事業とは切り離して考え、金沢5 RC合同事業という方向へ持っていく。

その場合 事業費総額 400万円
会員負担額(1人当たり) 12,000円

●職業奉仕委員会

職場訪問例会(夫人同伴)の件

5月12日(木)、ホワイトハウスで昼食、その後マイクロバスにて水野会員宅を訪問。美智子妃殿下への献上品を拝観する。

夫人会費 1,500円

●山田安隆元会員へのお見舞の件

ロータリー随想

京都再発見

柴田 三郎

私は、仕事のお蔭で50年を、商用の旅でずいぶん各地を廻ったが、青二才時代も、あれこれ節約しても旅館だけは其の土地での一流を選んだ。衛生的で心豊かに休養がとれるからである。

京都では、魅屋町の“柊家”と問屋町の“晴鴨楼”が好きであった。戦後であるが当時一流であった“都ホテル”に宿泊した折、全従業員の「要求貫徹」なる勇ましきハチマキ姿にはガッカリした。

京都は、いつ幾度訪れても飽きず、見果てぬ、大好きな街である。奥深い歴史があって、ワビがあり、サビがあり、もの静かなただずまいに加えて、雅やかな京都なまりにも魅力があり、華麗な手造りの和菓子、仁清、乾山を偲ばす京焼など……。



長女と長男を相次いで京都に学ばせたのも、こうした私の先入感からで、この2人の8カ年を陣中見舞の口実に京都を訪れるのが、この上もない喜びであった。長男の下宿は高野川のほとり、北山杉の山並みも遠からぬ田園の中に在った。楽隠居したら此の界限で……と、土地を求めようかとさえ考えた事もあったが、計らずも今の洛北RCのテリトリーであるのも奇縁である。

こんどの竜安寺は、何回目かであるが、あの縁側にゆっくり坐して瞑想、心眼で視る禅の庭であると思うが、悲しいかな、私には到底その境地にはなれない。工事中で見られなかったが、ここに

有る「吾れ、唯、足るを知る」の石の手洗鉢は臉にやきついている。金閣は背景の衣笠山があって引き立っているが、池の中に浮んで見える黄金の楼閣にこそ美観を発見する。義満ほどの風流人、定めし、それを計算にいれての設営であったろうか。

この近くに、“旅亭きぬかけ”が在って、しゃれた和風で、かつては、よんごとなき御仁の別邸らしい風情である。昭和24年頃の早春の一夜を比処で過したが、底冷えのする翌朝、障子をあげると庭園は、意外や美しい雪景色である。青い竹、真紅の椿の白との配色が素晴らしく、そして目を上げると、“きぬかけ山”が華麗な銀色に映えていて、まさに天下の絶景である。

昔、足利義満が、暑いある日、涼感を求めて「あの山に雪を降らせよ」と下知を出した。世は思いのままになる驕れる將軍の難題であった。京は上を下への大騒ぎの果て、街中の白絹をかき集めて山を包み、雪に見せた。爾来、この山を“きぬかけ山”或いは“衣笠山”と呼ぶようになった……と。

幸運なるかな、今朝の柴田將軍は偶然にも、大自然に恵まれて雪の“きぬかけ山”を望見したのである。帰りがけに女中さんが、スペシャル・サービスに案内してくれたのが、時の自由党の大野伴睦親分が、今のロッキードのような汚職にからんで身を此処に潜めたが、検察に踏み込まれた彼氏は、とっさに、ふとん部屋に逃げ込んだ。豪華な2階の一室に金屏風が立っていて、それをよけると廊下に通じて押し入れがあった。元禄の昔、吉良の屋敷の掛軸の裏に逃げ道があった、それである。くだんの女中さんの曰く「新名所どっせい……」と、なるほど迷所だわいと苦笑を禁じ得なかった。

洛北さんとの懇親会で隣り合わせて名刺交換すると、「株式会社きぬかけ菓舗、社長北浜清一」とある。私が“旅亭きぬかけ”を憶い起したのは当然で、私の物語に北浜さんの目は反応に輝き「私の工場は、その近所です。あれは昭和15年、さる財界人が、金に糸目をつけず建てたもので、若くて美しい女将が居たでしょう……残念にも近年とりこわして、鉄筋の電報局が建ちました」と。もう一度、訪ねて見たかった私はガッカリしたが、30年忘れ得なかった消息を、詳細に御存知の北浜さんと隣り合ったのも、ロータリーのとりもつ奇縁であった。

